青年期における自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連

北　村　譲　崇

京都大学大学院　人間・環境学研究科　共生人間学専攻
〒 606-8501　京都市左京区吉田二本松町

要旨　本研究では，青年期における自尊感情の高さおよび変動性が，相手との関係に応じた自己の変化とどう関連するかを検討した．250 名の大学生を対象に質問紙調査を実施し，自尊感情の高さ，関係に応じた自己の変化程度，変化動機，変化意識を調べた（調査 1）．また第 1 調査の参加者のうち 68 名の大学生を対象に，携帯メールを用いて 7 日間にわたる自尊感情の計測を実施し，自尊感情の変動性を調べた（調査 2）．その結果，自尊感情の高さは，自己の変化に対して肯定的な者ほど高かった．自尊感情の変動性は，男性の場合，自分の弱さを隠そうと演技をする者ほど安定しており，女性の場合，相手との関係において自然と自分が変化する者ほど不安定であった．

1．問題と目的

青年期は自尊感情が低くなり（無藤・佐久間・若本，2006），頻繁に変動する時期であるとされる（Adelson & Doehrman, 1980）．本研究は，こうした青年期の自尊感情の特質はどのような要因と関連するのかを，関係的自己の可変性の観点から検討するものである．

（1）自尊感情の変動性について

自尊感情（self-esteem）とは，「自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚―感情―」（遠藤，1992，p. 19）であり，自尊感情の高さは精神的健康の指標として注目されてきた．しかし一方で，自尊感情の高い者のほうが怒りや敵意を示しやすいこと（Baumeister, Smart & Boden, 1996）など，自尊感情の高さには否定的な側面があることも指摘されてきた．こうした結果をふまえて，近年では自尊感情をその高低だけでなく，変動性の観点からとらえ直す動きが高まっている．自尊感情の変動性とは，自尊感情が短時間でどの程度変動するかを意味する．近年の研究は，この自尊感情の変動性の高さが，不適応とされる心理的特徴と関連することを実証しており，たとえば，自尊感情の変動性が高い者は怒りや敵意を示しやすく（Kernis, Grannemann & Barclay, 1989），抑うつが高い（Kernis, Grannemann & Mathis, 1991）などの結果が示されている[1)]．

この自尊感情の変動性に着目して，自尊感情を 2 つに分けてとらえる立場がある．Leary, Tambor, Terdal & Downs（1995）は，自尊感情には，状態自尊感情（state of self-esteem）と特性自尊感情（trait of self-esteem）の 2 つの側面があるとする．前者はある時点における自分に対する評価的感情であり，状況の推移にともなって変動するが，後者は時間や状況をこえた自分に対する評価的感情であり，比較的安定したものである．従来の研究が主に扱ってきたのは，自尊感情の特性的な高さであり，それとは別のものとして，自尊感情の状態的側面の変動性もかさねて検討する必要がある．

それでは一体，どのような要因が自尊感情の変動性の高さに影響を及ぼすのであろうか．Kernis et al.（1998）や小塩（2001）は，その要因の 1 つとして自己像の不安定さを挙げている．自己像が不安定な者は，自己を評価する際の基準が曖昧であり，日常の様々な出来事を経験する中で自尊

感情が変動しやすくなると考えられる（小塩，2001）．青年期はそれまでの自己像が解体され，新たな自己像が再構成される時期である．したがって自己像が不安定になりがちであり，頻繁な自尊感情の変動が見られることが指摘されている（Adelson & Doehrman, 1980）．しかし，自己像のどのような不安定さが自尊感情の変動性に影響を与えるのかを検討した例は見当たらない．自尊感情の変動性が自己像のどのような不安定さと関連するかを検討することは，自尊感情の変動性への理解を深める上で重要であり，同時に青年期の心性を理解する上でも意義があるといえよう．

（2）関係的自己の可変性について

関係的自己とは，誰かと一緒にいるときの自己のことを指し（佐久間・無藤，2003），他者との関係において私がどのような人間であるかについての表象も，自己概念の重要な一部である（池上・遠藤，2008）．一般に青年期には自己概念は複雑に分化し，友人といる際の自分は快活だが，両親といる際の自分は無口であるといったように，自己概念が特定の関係性や状況と結びついて把握されるようになる（Coleman & Hendry, 1999）．そして，自己概念全体の中でも関係的自己が大きな意味をもつようになる．上述の例のように自己像内で矛盾する特性をかかえることは葛藤の要因にもなるが，青年は複雑で豊かになった自己概念をまとめ上げる力を十分に持ち合わせておらず（Harter & Monsour, 1992），自己像が不安定になりがちである．このように青年期における自己像の不安定さには，多様な関係的自己をもつことで生じる不安定さがある．

そして，多様な関係的自己をもつことは，青年の自尊感情にも影響を与える．佐久間・無藤（2003）は，相手との関係に応じて自己が多様に変化することを「関係的自己の可変性」と呼び，その性質を変化程度・変化動機・変化意識の 3 つの観点から測定し，自尊感情の高さとの関連を検討している．女性の場合，変化動機の下位因子である演技隠蔽（自分の嫌いなところや弱いところを隠すなど）や関係維持（相手とうまくやっていきたい，関係を壊したくないなど）の動機が高い者ほど自尊感情が低く，変化意識の下位因子である肯定的意識（自己の変化は当然であり，必要だなど）が高い者ほど自尊感情が高いことが示されている．また男女ともに，変化意識の下位因子である否定的意識（演じているようで嫌だ，疲れるなど）が高い者ほど自尊感情が低いことが示されている．しかし，自尊感情の変動性との関連については検討されていない．他者との関係の中で多様な自己概念をもつことは，関係性における自己像を不安定なものとし，自尊感情の変動をもたらす可能性が考えられる．そして自尊感情の変動性との関連を検討することは，青年期に多様な関係的自己をもつことが適応的か否かを知る上で重要である．

（3）性差について

自尊感情を検討する上で考慮すべき点に性差の問題がある．この点については古くから論じられており，青年期前期以降[2)]，発達がすすむにつれて自尊感情の高さに性差は見られなくなるが，自尊感情の基盤（基本的に対人的条件または個人的条件のどちらに基づいて自己を評価するか）は男性では達成などの個人的条件に，女性では対人的条件に基づくように変化するという（Carlson, 1970）．わが国でも，梶田（1988）が高校生・大学生を対象とした自己評価的意識にかんする質問紙調査から，女性の場合，他者のまなざしの意識に関わるもの（少しでも人からよく見られたい，人のうわさが気になるなど）が自己評価的意識の諸意識全体の中で大きな比重を占めるのに対し，男性の場合これと並んで，自己に対するまなざしに関わるもの（自分に自信を持っている，自分がいやになるなど）の比重もまた大きいことを指摘している．これらの研究は，自尊感情の基盤として他者との関係性をどの程度重視するかについて，男女間に差が見られることを示している．

また自尊感情のみならず，関係的自己の可変性にも性差の問題がある．この点については，本当の自分とは違う自分を相手の前で示す見せかけの自己行動（本当はやりたくないことでも周りの友達につき合うなど）が，青年期の女性に顕著に見られること（無藤・佐久間・若本，2006）が大き

く影響している．前掲の佐久間・無藤（2003）によると，女性は男性に比べて，本当の自分を相手に表明できずに隠すことを見せかけの自己行動とみなして悩む傾向にあり，関係的自己の変化に否定的な意識をもちやすいという．また女性の場合，自尊感情の低さと演技隠蔽による自己変化の動機との間に関連が見られたが，男性ではこの関連が見られず，女性は演技隠蔽の動機を自分の嫌なところを隠すといった消極的な方向性でとらえ，男性は相手に自分をよく見せるといった積極的な方向性でとらえる傾向があるとされる．女性はそれだけ見せかけの自己を演じることを否定的に考えているとも受けとれる．このように，関係的自己の変化の動機やそれに対する意識については，男女間にとらえ方の差がある．したがって，自尊感情と関係的自己の可変性の関連を検討する上では，性差の問題を考慮する必要があるといえよう．

（4）本研究の目的

本研究の目的は，青年の自尊感情が関係的自己の可変性とどのような関連にあるかを検討することである．

そこでまず調査 1 として，自尊感情の高さと関係的自己の可変性との関連を検討する．この点については，すでに佐久間・無藤（2003）で検討されているが，自尊感情の高さと変動性の 2 側面から関係的自己の可変性との関連をとらえるために，本研究でも再度関連を検討する．ここで扱う自尊感情の高さとは，自尊感情の特性的な高さであり，特性自尊感情のことを指す．関係的自己の可変性については，変化程度・変化動機・変化意識の 3 つの変数を取り上げる．相手との関係に応じて自己が多様に変化する性質をとらえるのであれば，自己がどの程度変化するのか（変化程度）のみを取り上げればよいと思われるかもしれない．しかし日本を含む東洋文化圏では，自己は柔軟で変動しやすい構造を持っており，特定の状況における相手との関係で自己が定義される傾向にある（Markus & Kitayama, 1991）．それゆえ日本人の自己は関係依存的であり，そもそも関係に応じた自己の変化が生じやすい．したがって自己の変化程度だけでなく，その変化がなぜ生じるのか（変化動機），その変化をどのように受け止めているのか（変化意識）という，変化の背景にあるものもとらえる必要がある．

つづいて調査 2 では，自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連を検討する．ここで扱う自尊感情は，自尊感情の変動しうる状態的な側面であり，状態自尊感情のことを指す．自尊感情の変動性を扱う研究では，4〜7 日間にわたって毎日 1 回ないし 2 回，状態自尊感情尺度の評定を実施し，その個人内標準偏差を算出して自尊感情の変動性の指標とする（阿部・今野・松井，2008 など）．関係的自己の可変性については，調査 1 と同様に，変化程度・変化動機・変化意識の 3 つの変数を取り上げて検討する．

また本研究では，性差にも着目する．佐久間・無藤（2003）では，自尊感情と関係的自己の可変性との関連で性差が見られ，先に述べたとおり主に女性において両者がどう関連するのかが明らかになった．一方男性では，自尊感情の高さと否定的意識との間に負の相関が見られたのみで，両者がどのような関係にあるのかはまだ不明瞭である．本研究で新たに自尊感情の変動性という視点を導入することにより，先行研究では不明瞭であった男性における自尊感情と関係的自己の可変性との関連を改めて検討したい．

2．調　　査　1

（1）方法

調査時期と調査対象者

2009 年 11 月から 12 月にかけて，近畿圏の 6 つの大学の学部生・院生 250 名（男性 121 名，女性 129 名）に対して質問紙調査を実施した．調査対象者の平均年齢は 20.0 歳（SD＝1.83）であった．なお，調査の一部は大学の講義時間を利用して集団形式で実施し，その場で回収した．残りは大学構内にて個別形式で学生に回答を依頼し，その場で回収した．

質問紙の内容

① **特性自尊感情**　特性自尊感情を測定するために，Rosenberg の自尊感情尺度の日本語版（桜井，2000）の 10 項目について，「いいえ（1 点）」

から「はい（4 点）」までの 4 件法で回答を求めた．Rosenberg の自尊感情尺度は，評価的なフィードバックを与えても得点が変化しないとの報告があり（小林，2004），状態的な心理に左右されにくく，特性としての自尊感情を測るのに適切であると考えられる．そのため，阿部・今野・松井（2008）など自尊感情の変動性を扱った研究においても，特性自尊感情の測定に用いられており，この尺度を用いることにした．

次に，佐久間・無藤（2003）にならって，「私たちはいろいろな人との関係の中で生活していますが，そういった人間関係の中で，例えば，母親と一緒にいるときの自分，友達といるときの自分，恋人と一緒にいるときの自分などが考えられると思います．それではそれぞれの人間関係における自分の様子を思い起こして，次の質問に答えてください」という文章の後で，以下②～④の質問に回答を求めた．

② **変化程度**　人間関係に応じて自分がどの程度変わるのかについて尋ねた．回答は「全く変わらない（1 点）」から「非常に変わる（6 点）」までの 6 件法で求めた．

③ **変化動機**　変化動機尺度（佐久間・無藤，2003）の 26 項目について，「全くそう思わない（1 点）」から「とてもそう思う（5 点）」までの 5 件法で回答を求めた．

④ **変化意識**　変化意識尺度（佐久間，2002）をもとに，肯定的意識と否定的意識についてそれぞれ 5 項目，合計 10 項目の変化意識尺度を作成した．回答は「全くそう思わない（1 点）」から「とてもそう思う（5 点）」までの 5 件法で求めた．

（2）データの整理

調査 1 について，以下の手続きで得点化を行なった．

① **特性自尊感情尺度**　特性自尊感情尺度 10 項目に対して主成分分析を行なったところ，すべての項目が第 1 主成分に高い負荷量を示し，第 1 主成分の寄与率は 47.4% であった（Table 1 参照）．つづいて，この 10 項目への回答の信頼性係数を算出したところ，α=.87 と十分に高い値を示した．そこで 10 項目すべてを採用し，逆転項目を処理した上で，合計得点を“自尊感情の高さ得点”とした．

② **変化程度尺度**　評定値（1～6 点）をそのまま“変化程度得点”として算出した．

③ **変化動機尺度**　佐久間・無藤（2003）によると，変化動機尺度は 4 つの下位領域からなるので，因子分析を施して下位尺度ごとに得点を算出した．まず，変化動機尺度 26 項目について因子分析（主因子法・プロマックス回転）を 4 因子解によって行なったところ，5 つの項目の負荷量が .40 に満たなかったので，この 5 項目を削除した残りの 21 項目について再度因子分析を実施した．その結果，「相手に自分をよく見せたいから」，「自分の弱いところを隠しているから」などの 9 項目（α=.85）からなる“演技隠蔽因子”，「相手との関係の中で自然にそうなってしまうから」，「相手との関係の中で無意識にそうなってしまうから」などの 5 項目（α=.90）からなる“自然・

Table 1　自尊感情尺度の主成分分析結果

項目内容	
1. 私は自分に満足している．	.69
2. 私は自分がだめな人間だと思う．（R）	.78
3. 私は自分には見どころがあると思う．	.70
4. 私は，たいていの人がやれる程度には物事ができる．	.65
5. 私には得意に思うことがない．（R）	.67
6. 私は自分が役立たずだと感じる．（R）	.80
7. 私は自分が，少なくとも他人と同じくらいの価値がある人間だと思う．	.72
8. もう少し自分を尊敬できたらと思う．（R）	.40
9. 自分を失敗者だと思いがちである．（R）	.63
10. 私は自分に対して，前向きの態度をとっている．	.75
寄与率（%）	47.40%

注 1）（R）は逆転項目．

無意識因子”,「相手との関係を壊したくないから」,「場の雰囲気を壊したくないから」などの 4 項目（α=.67）からなる“関係維持因子”,「相手によって心を許している程度が違うから」,「相手によって自分の内面を見せられる度合いが違うから」などの 3 項目（α=.61）からなる“関係の質因子”が得られた．各因子に負荷量の高い項目を合計し項目数で除算した値を，それぞれ“演技隠蔽得点”,“自然・無意識得点”,“関係維持得点”,“関係の質得点”とした（Table 2 参照）.

④ **変化意識尺度**　変化意識尺度 10 項目に対して因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行なったところ，3 因子が抽出された．しかし，第 3 因子に負荷量の高い項目はすべて第 1 因子に対しても .30 以上の負荷量があった．そこで，それら 3 項目を除外した残りの 7 項目について再度因子分析を実施し，2 因子が抽出された．つづいて，2 因子のどちらに対しても負荷量が .30 以下であった 1 項目を削除し，残り 6 項目についてもう一度因子分析を行なった．その結果,「苦ではない」,「悪いことじゃない」などの 4 項目（α=.67）からなる“肯定的意識因子”,「左右されないようになりたい」「演じることには反対だ」の 2 項目（α=.57）からなる“否定的意識因子”が得られた．各因子に負荷量の高い項目を合計し項目数で除算した値を，それぞれ“肯定的意識得点”,“否定的意識得点”とした（Table 3 参照）.

Table 3　変化意識尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	f1	f2	共通性
肯定的意識 : 4 項目（α=.67）			
4. 悪いことじゃない.	.75		.57
8. 嫌だなと思う.（R）	−.65		.45
10. 不思議ではない.	.50		.21
5. 苦ではない.	.49		.27
否定的意識 : 2 項目（α=.57）			
3. 左右されないようになりたい.		.75	.75
2. 演じることには反対だ.		.48	.48

注 1）（R）は逆転項目.

（3）各尺度得点の性差

佐久間・無藤（2003）では，自尊感情や関係的自己の可変性の指標で性差が見られた．そこで，各尺度得点の性差を検討するために t 検定を実施

Table 2　変化動機尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目内容	f1	f2	f3	f4	共通性
演技隠蔽 : 9 項目（α=.85）					
24. 相手に自分をよく見せたいから.	.98	.01	−.18	−.03	.77
19. 自分のいいところを見せたいから.	.77	.00	−.03	−.10	.55
3. 相手によって自分をどう見せたいかが違うから.	.58	−.21	−.01	.10	.39
25. 相手に嫌われたくないから.	.58	.10	.17	.06	.52
16. 自分の弱いところを隠しているから.	.58	.02	−.03	.00	.32
7. 自分の嫌いなところを隠しているから.	.55	.04	.05	−.14	.32
9. 相手に自分をより受け入れてほしいから.	.52	.05	.03	.02	.30
2. 相手の望む自分になろうとするから.	.46	−.18	.19	.15	.41
22. 相手とうまくやっていきたいから.	.35	.09	.19	.17	.32
自然・無意識 : 5 項目（α=.90）					
20. 相手との関係の中で自然にそうなってしまうから.	.11	.88	−.10	.02	.79
26. 相手との関係の中でなんとなくそうなっているから.	.04	.82	−.07	.04	.69
12. 相手との関係の中で自動的にそうなってしまうから.	−.07	.80	.11	.05	.67
8. 相手との関係の中で無意識にそうなってしまうから.	−.05	.78	−.02	−.02	.61
4. 相手との関係の中で気づくとそうなっているから.	−.03	.75	.05	−.08	.53
関係維持 : 4 項目（α=.67）					
17. 場の雰囲気を壊したくないから.	−.03	.00	.60	.09	.36
13. 相手を傷つけたくないから.	.02	−.10	.60	−.17	.39
5. 相手との関係を壊したくないから.	.20	.08	.52	−.03	.45
23. 相手の気持ちに応じるから.	.25	.04	.35	−.03	.28
関係の質 : 3 項目（α=.61）					
1. 相手によって心を許している程度が違うから.	−.06	−.05	−.08	.75	.52
6. 相手によって親密さの程度が違うから.	−.05	.07	.07	.65	.46
18. 相手によって自分の内面を見せられる度合いが違うから.	.12	.00	−.06	.42	.20

Table 4　各尺度得点の男女別平均値・標準偏差と t 検定の結果

	男性		女性		t 値
	M	*SD*	*M*	*SD*	
自尊感情の高さ	25.85	6.08	24.60	6.01	1.61
変化程度	4.09	1.07	4.20	1.13	−0.74
演技隠蔽	3.37	0.68	3.34	0.67	0.33
自然・無意識	3.74	0.79	3.81	0.76	−0.76
関係維持	3.48	0.70	3.32	0.69	1.82†
関係の質	4.11	0.57	4.20	0.50	−1.34
肯定的意識	3.67	0.64	3.59	0.55	0.94
否定的意識	2.92	0.83	3.12	0.83	−1.97*

注 1）$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$

した．各尺度得点の男女別の平均値・標準偏差と t 値を Table 4 に示す．

自尊感情の高さには，有意な性差は見られなかった．一方，関係的自己の可変性の指標については，変化動機では関係維持の動機で性差の有意傾向が見られ，男性は女性よりも相手との関係を維持しようとする動機が高い傾向にあった．また，変化意識では否定的意識において有意な性差が認められ，女性は男性よりも関係的自己の変化に対する否定的意識が高いことが示された．なお，変化動機では男女ともに関係の質の動機がもっとも高く，演技隠蔽の動機がもっとも低かった．また，変化意識では男女ともに肯定的意識が否定的意識よりも高いことがわかった．

（4）各尺度得点間の相関

各尺度得点間の相関関係を知るために，Pearson の単相関係数を算出した（Table 5 参照）．自尊感情の高さと関係的自己の各指標との相関関係については，自尊感情の高さと変化程度，変化動機との間に有意な相関は認められなかった．一方，自尊感情の高さと肯定的意識との間では，男女ともに有意な正の相関が認められた．また，自尊感情の高さと否定的意識との間で，男性では有意傾向の負の相関が，女性では有意な負の相関が認められた．

関係的自己の各指標間の相関関係については，男女によって差が見られた．変化程度については，男女ともに自然・無意識の動機，関係の質の動機との有意な正の相関が認められた一方で，女性でのみ演技隠蔽の動機との有意な正の相関が認められた．また変化程度と否定的意識との間で，男性では有意な負の相関が，女性では有意傾向の負の相関が認められた．変化動機については，男性でのみ演技隠蔽の動機において，肯定的意識との間で有意な負の相関が，否定的意識との間で有意傾向の正の相関が認められた．また同じく男性でのみ，関係の質の動機と肯定的意識との間に有意な正の相関が認められた．一方，女性でのみ自然・無意識の動機と否定的意識との間に有意な正の相関が認められた．

（5）自尊感情の高さと関係的自己の可変性との関連

自尊感情の高さと関係的自己の可変性との関連を検討するために，重回帰分析（強制投入法）を実施し，標準偏回帰係数を算出した（Table 6 参照）．変化程度，変化動機から自尊感情の高さへの影響は男女ともに有意ではなかった．一方，男女ともに肯定的意識から自尊感情の高さへの有意な正の影響が見られ，関係における自己の変化に

Table 5　自尊感情の高さ，変化程度，変化動機，変化意識の単相関係数

	自尊感情の高さ	変化程度	変化動機				変化意識	
			演技隠蔽	自然・無意識	関係維持	関係の質	肯定的意識	否定的意識
自尊感情の高さ	—	−.09	−.07	−.12	−.09	−.10	.21*	−.15†
変化程度	−.06	—	.10	.16*	.04	.29**	.03	−.16*
演技隠蔽	−.05	.25**	—	.04	.63***	.17*	−.21*	.15†
自然・無意識	−.09	.15*	.03	—	−.04	.26**	.06	.05
関係維持	.08	.09	.53***	.06	—	.10	−.09	.01
関係の質	.04	.18*	.17*	.22**	−.01	—	.16*	.06
肯定的意識	.39***	−.07	−.07	−.01	−.05	.11	—	−.36***
否定的意識	−.19*	−.14†	.02	.26**	.07	.07	−.41***	—

注 1）$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$
注 2）相関は右上が男性，左下が女性．

Table 6　関係的自己の可変性から自尊感情の高さへの標準偏回帰係数

	β 自尊感情の高さ 男性	女性
変化程度	−.07	−.02
演技隠蔽	.09	−.11
自然・無意識	−.10	−.09
関係維持	−.12	.17
関係の質	−.08	.04
肯定的意識	.22*	.38***
否定的意識	−.08	−.03
R^2※	.03	.13

注 1）※自由度調整済み決定係数
注 2）*p<.05, ***p<.001

肯定的な者ほど自尊感情が高いことが示された．しかし，否定的意識から自尊感情の高さへの影響は男女ともに有意ではなかった．

（6）調査 1 の考察

各尺度の性差について，変化動機では，男性は女性よりも相手との関係を維持しようとする動機が高い傾向にあった．男性は女性よりも相手との関係や場の雰囲気を壊さないために，状況に合わせて自分を使い分ける傾向にあると考えられる．変化意識では，女性は男性よりも否定的な意識が高かった．女性は男性よりも相手との関係に応じた自己の変化に対して，いちいち左右されたくないといった否定的な意識を抱いていることがわかる．また男女ともに，自己変化の動機は相手との関係の質の違いがもっとも高く，自己変化に対する肯定的意識は否定的意識よりも高かった．この結果は佐久間・無藤（2003）と合致し，相手との親密さなどを考慮して自分を使い分け，それは悪いことではないのだと肯定的に受け止める青年像が浮かび上がる[3)]．

自尊感情の高さと関係的自己の各指標との関連については，男女ともに変化程度と変化動機の説明力が弱かった．相手に応じて自己が変化する度合い，その変化を引き起こす動機は，共に自尊感情の高さに影響しないとわかる．一方，自尊感情の高さと変化意識の間では，男女ともに自己変化を肯定的にとらえる者ほど自尊感情が高かった．相手との関係に応じた自己の変化を，悪いことではない，苦ではないと肯定的に受け止められる者ほど，関係に応じた様々な自己概念を自分なりに受容しており，自己に対して高い評価を下せるものと考えられる．このように青年期の男女の場合，相手との関係において自己が変化する程度や動機よりも，自己の変化を肯定的に受け止められるかどうかによって，自尊感情の高さが違ってくるようである．

3．調　　査　2

（1）方法

調査時期と調査対象者

2009 年 11 月から 12 月にかけて，調査 1 の実施時に募集した参加者 68 名（男子 31 名，女子 37 名）に対して，携帯メールを用いた 7 日間の追跡調査を実施した．調査対象者の平均年齢は 20.5 歳（SD=2.21）であった．なお参加者の募集に当たっては，調査 1 の回答回収時に追跡調査の内容と参加者に対して謝礼（文房具）が渡されることを説明し，希望者を募る手順で募集した．

調査の形式

自尊感情の変動性を扱う研究では，同一対象者に毎日連続して自尊感情尺度の評定を行なってもらう．測定方法は日誌法を用いることが多く，たとえば小塩（2001）は 6 日間毎晩記入する小冊子を対象者に配布し，1 週間後に回収する方法をとっている．しかし日誌法には，対象者が毎日回答せず，まとめて回答した場合を判別できない問題点がある．そこで本研究では，阿部・今野（2005）にならって携帯メールを用いた調査を実施した．携帯メールを用いて毎日回答を送信してもらうことで，上記の問題点を克服するためである．したがって調査 2 は，あらかじめ参加者に質問紙を配布し，筆者から送付する 1 日 1 回の回答依頼メールを受信した後で，質問紙を見ながら回答メールを作成・返信してもらう形式で行なわれた．

質問紙の内容

① **状態自尊感情**　状態自尊感情を測定するため

Table 7　状態自尊感情尺度の尺度項目

項目内容
1. いま，自分は人並みに価値のある人間であると感じる．
2. いま，自分には色々な良い素質があると感じる．
3. いま，自分は敗北者だと感じる．（R）
4. いま，自分は物事を人並みにうまくやれていると感じる．
5. いま，自分には自慢できるところがないと感じる．（R）
6. いま，自分に対して肯定的であると感じる．
7. いま，自分にほぼ満足を感じる．
8. いま，自分はだめな人間であると感じる．（R）
9. いま，自分は役に立たない人間であると感じる．（R）

注 1）（R）は逆転項目．

に，状態自尊感情尺度（阿部・今野，2007）の 9 項目について，「あてはまらない（1 点）」から「あてはまる（5 点）」までの 5 件法で回答を求めた（Table 7 参照）．阿部・今野（2007）の作成した状態自尊感情尺度は，Rosenberg の自尊感情尺度の項目文を「いま…感じる」となるように修正したものであり，状態不安（短期間の緊張水準の変動による不安）との有意な負の相関が見られたが，特性不安（長期的な性格特性としての不安）との間に相関は見られず，状態的な心理に対して弁別性のあることが実証されている．

（2）データの整理

調査 2 については，以下のように得点化を行なった．

① **状態自尊感情尺度**　状態自尊感情尺度 9 項目に対して主成分分析を行なったところ，すべての項目が第 1 主成分に高い負荷量を示し，第 1 主成分の寄与率は 46.3% であった．そこで，9 項目すべてを採用し，逆転項目を処理した上で合計得点を 1 日ごとに算出した．そして，7 日分の合計得点の個人内標準偏差を算出し，“自尊感情の変動性得点”とした．自尊感情の変動性では，性差の有意傾向が認められ（$t(66)=-1.89, p<.10$），女性は男性よりも自尊感情の変動性が高い傾向にあることが示された．

（3）各尺度得点間の相関

各尺度得点間の相関関係を知るために，Pearson の単相関係数を算出した（Table 8 参照）．自尊感情の変動性と関係的自己の各指標との相関関係については，自尊感情の変動性と変化程度，変化意識との間に有意な相関は認められなかった．一方，自尊感情の変動性と変化動機との間では，男性でのみ演技隠蔽の動機，関係の質の動機との負の相関が認められた．

関係的自己の各指標間の相関関係では，変化程度については，男女ともに否定的意識との有意傾向の負の相関が認められた．また男性でのみ，変化程度と関係の質の動機との間に有意な正の相関が認められた．変化動機については，女性でのみ演技隠蔽の動機，関係維持の動機と肯定的意識との間に有意傾向の負の相関が，自然・無意識の動機と否定的意識との間に有意な正の相関が認められた．

（4）自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連

自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関

Table 8　自尊感情の変動性，変化程度，変化動機，変化意識の単相関係数

	自尊感情の変動性	変化程度	変化動機				変化意識	
			演技隠蔽	自然・無意識	関係維持	関係の質	肯定的意識	否定的意識
自尊感情の変動性	—	−.22	−.38*	−.08	−.08	−.34*	.03	.20
変化程度	.12	—	−.03	.16	−.04	.38*	.05	−.26†
演技隠蔽	.05	.09	—	.03	.68***	.40**	−.09	−.14
自然・無意識	.21	−.11	−.11	—	.00	.19	.21	−.02
関係維持	.16	−.04	.59***	.05	—	.26†	.10	−.18
関係の質	−.09	.08	−.12	.09	−.33*	—	.15	−.15
肯定的意識	−.05	.04	−.24†	−.09	−.23†	−.03	—	−.26†
否定的意識	−.08	−.25†	.07	.51**	.10	.16	−.45**	—

注 1）†$p<.10$, *$p<.05$, **$p<.01$, *** $p<.001$
注 2）相関は右上が男性，左下が女性．

Table 9　関係的自己の可変性から自尊感情の変動性への標準偏回帰係数

	β 自尊感情の変動性 男性	女性
変化程度	−.14	.10
演技隠蔽	−.53†	−.02
自然・無意識	−.02	.36†
関係維持	.33	.14
関係の質	−.14	−.04
肯定的意識	.02	−.14
否定的意識	.13	−.31
R^2※	.06	−.07

注 1）※自由度調整済み決定係数
注 2）†$p<.10$

連を検討するために，重回帰分析（強制投入法）を実施し，標準偏回帰係数を算出した（Table 9 参照）．変化程度，変化意識から自尊感情の変動性への影響は男女ともに有意ではなかった．一方，変化動機から自尊感情の変動性への影響については，男性の場合，演技隠蔽の動機から有意傾向の負の影響が見られ，演技隠蔽の動機が高い男性ほど，自尊感情の変動性が低い傾向にあることが示された．また，女性の場合，自然・無意識の動機から有意傾向の正の影響が見られ，自然・無意識の動機が高い女性ほど，自尊感情の変動性が高い傾向にあることが示された．

（5）調査 2 の考察

まず自尊感情の変動性において性差が見られ，女性は男性よりも自尊感情の変動性が高い傾向にあることがわかった．先行研究においても，これまで自尊感情の変動性の性差に言及したものは見当たらず，なぜこうした性差が見られたのか，以後の考察でも性差に触れながらくわしく見ていきたい．

自尊感情の変動性と関係的自己の可変性の各指標との関連では，男女ともに変化程度，変化意識の説明力が弱かった．相手に応じて自己が変化する度合い，その変化に対する意識は，共に自尊感情の変動性に影響しないことがわかる．自尊感情の変動性と変化動機の間では，男性でのみ，自分の弱いところを隠すなどの演技隠蔽の動機が高い者ほど自尊感情が安定する傾向にあった．これは男性が演技隠蔽を積極的な意味でとらえ，自分の弱い部分をうまく隠してよく見せることにより，自己評価の頻繁な変動を防いでいるためと推察される．女性にこの傾向が見られないのは，問題部分で述べたように，女性は見せかけの自己行動に対する否定的意識から，演技隠蔽の動機を消極的な意味でとらえているためではないかと考えられる．一方，女性でのみ，相手との関係において自然と自分が変化するなどの自然・無意識の動機が高い者ほど自尊感情が不安定な傾向にあった．これは相手との関係やその場の状況に応じて自然と自分が変化する女性は，自己評価の基準がその関係や状況に応じた流動的なものになるためではないかと考えられる．梶田（1988）も指摘するように，女性の場合は自己評価的意識の中でも，人のうわさが気になるなどの他者のまなざしの意識に関わるものの比重が大きく，自己評価の基準が相手との関係や状況に応じたものになりやすい．男性にこの傾向が見られないのは，男性の自己評価的意識では他者のまなざしに関わるものと同様に，自分に自信を持っているなどの自己に対するまなざしに関わるものの比重が大きく，自己評価の基準が女性ほど関係や状況に応じたものになりにくいためと推察される．以上のように，自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連のあり方には，男女によって差が見られる．こうした関連のあり方の差が自尊感情の変動性の高さにおける性差につながっているのであろう．

4．結　　論

本研究の目的の 1 つは，自尊感情の高さと関係的自己の可変性との関連を検討することであった．調査の結果，自尊感情の高さには関係的自己の変化に対する意識が関連することがわかった．相手に応じて自己が変化することを肯定的に受け入れる青年ほど自尊感情が高かった．日本では特定の他者との関係の中で自己が定義される傾向にあるため（Markus & Kitayama, 1991），往々にして多様な関係的自己をもちやすい．したがって関係的自己の多様さをどのように受け止め，時にはその多様さゆえに生じる矛盾や葛藤をどう乗り越える

のかが，心理的適応上の課題となるのであろう．

本研究の目的のもう 1 つは，自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連を検討することであった．調査の結果，自尊感情の変動性は関係的自己の変化動機と関連することがわかった．男性の場合，自分の弱い部分を隠してよく見せようと自己を変化させる者ほど，自尊感情が安定していた．これはその場の状況に柔軟に対応してうまく自分を変化させることで，自尊感情が上下するのを避け，適応的に生活しているものと推察される．たしかに，こうした柔軟さは適応性という点では良いかもしれないが，それが本当に青年期の発達にとって望ましいのかは注意深く検討する必要がある．なぜなら自尊感情を揺るがす出来事が自己のあり方を見つめ直すきっかけとなって，自己の変容や成長につながる可能性もあり，自尊感情が上下することを避けるばかりでも望ましくないと考えられるからである．

また女性の場合，相手との関係において自然と自分が変化する者ほど，自尊感情が不安定であった．ここから，相手との関係やその場の状況に応じて自然と自分が変化する女性は，自己評価の基準もその関係や状況に合わせた流動的なものになり，自尊感情が不安定になるものと推察される．女性の場合，自然と自己が変化する者ほど，関係に応じた自己の変化に対して左右されたくないといった否定的意識も高い[4]．どうすれば自己評価の基準が相手との関係に左右されないものになるかを検討することが，女性の自尊感情の安定を考える上で課題となってくるであろう．

付　記

本稿は平成 21 年度に大阪大学人間科学部に卒業論文として提出したもののデータを再分析し，改訂したものである．

注

1） 自尊感情の変動性の高さ（不安定さ）は，なぜ不適応な心理的特徴と関連するのであろうか。榎本（1998）によると，自尊感情が不安定であることは，自尊感情が低下することへの不安と自尊感情が高揚することへの願望を強める。その結果，他者からの評価的なフィードバックへの感受性が高まり，否定的な評価に対する過敏な反応が生起するという。

2） 青年期前期には，女性の自尊感情は男性よりも低いといわれている（無藤・佐久間・若本, 2006）。

3） 特に男性では，関係の質の動機と肯定的意識との間に有意な正の相関が認められており，相手との親密さなどを考慮して自分を変化させることと，自己の変化に対する肯定的意識とが結びついているとわかる。

4） 調査 1 および 2 の双方において，女性でのみ，自然・無意識の動機と否定的意識との間に有意な正の相関が認められている。

引 用 文 献

阿部美帆・今野裕之　2005　自尊感情の不安定性と自己価値の随伴性との関連　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集，**14**，pp. 131−132.

阿部美帆・今野裕之　2007　状態自尊感情尺度の開発　パーソナリティ研究，**16**，pp. 36−46.

阿部美帆・今野裕之・松井豊　2008　日誌法を用いた自尊感情の変動性と心理的不適応との関連の検討　筑波大学心理学研究，**35**，pp. 7−15.

Adelson, J., & Doehrman, M. J.　1980　The psychodynamic approach to adolescence. In J. Adelson（Ed.）*Handbook of adolescent psychology*. New York : John Wiley & Sons. pp. 99−116.

Baumeister, R. F., Smart, I., & Boden, J. M.　1996　Relation of threatened egoism to violence and aggression : The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, pp. 5−33.

Carlson, R.　1970　Comments on Ziller's formulation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **2**, pp. 264−268.

Coleman J., & Hendry, L. B.　1999　*The Nature of Adolescence*. 3rd Edition. London : Routledge.（コールマン，J., ヘンドリー，L. 白井利明他訳　2003　青年期の本質　ミネルヴァ書房）

遠藤辰雄　1992　セルフ・エスティーム研究の視座　遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編　セルフ・エスティームの心理学　ナカニシヤ出版　pp. 8−25.

榎本博明　1998　「自己」の心理学　サイエンス社

Harter, S., & Monsour, A.　1992　Developmental analysis of conflict caused by opposing attributes in the adolescent self-portrait. *Developmental Psychology*, **28**, pp. 251−260.

池上知子・遠藤由美　2008　グラフィック社会心理学　第 2 版　サイエンス社

梶田叡一　1988　自己意識の心理学　第 2 版　東京大学出版会

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C.　1989　Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, pp. 1013−1022.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Mathis, L. C.　1991　Stability of self-esteem as a moderator of the relation between level of self-esteem and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, pp. 80−84.

Kernis, M. H., Whisenhunt, C. R., Waschull, S. B., Greenier, K. D., Berry, A. J., Herlocker, C. E., & Anderson, C. A. 1998 Multiple faces of self-esteem and their relations to depressive symptoms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, pp. 657–668.

小林知博　2004　成功・失敗後の直接・間接的自己高揚傾向　社会心理学研究，**20**，pp. 68–79.

Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. T., & Downs, D. L. 1995 Self-esteem as interpersonal monitor : The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, pp. 518–530.

Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, pp. 224–253.

無藤隆・佐久間路子・若本純子　2006　自己意識はどのように育っていくのか　内田伸子編　発達心理学キーワード　有斐閣　pp. 145–168.

小塩真司　2001　自己愛傾向が自己像の不安定性，自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響　性格心理学研究，**10**，pp. 35–44.

佐久間路子　2002　大学生における関係的自己の可変性の理解　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢，**4**，pp. 85–94.

佐久間路子・無藤隆　2003　大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連　教育心理学研究，**51**，pp. 33–42.

桜井茂男　2000　ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討　筑波大学発達臨床心理学研究，**12**，pp. 65–71.

Instability of Self-esteem and Variability of Relational Self in Adolescence

Joji KITAMURA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto, 606–8501 Japan

Summary The purpose of this paper is to consider how level and instability of self-esteem are relevant to the concept of variability of self depending on one's social relations. 250 university students completed questionnaires which surveyed level of self-esteem, variability of self in relation to other, motive for and sense of variability (Survey 1). Among the students who had participated in the survey, 68 students completed questionnaires through mobile texting. For seven consecutive days, the 68 students completed questionnaires that measured the level of self-esteem to evaluate their instability of self-esteem (Survey 2). The main results were as follows : Positive sense of variability was positively correlated with level of self-esteem. For men, self concept variability by way of acting in order to hide their weakness was negatively correlated with instability of self-esteem. For women, unconscious variability of self concept was positively correlated with instability of self-esteem.